

今日の箇所は三つの部分、譬えの導入場面(25～29節)、譬えの部分(30節後半～35節)、結論の部分(36～37節)に分かれています。この譬えの核となる内容はイエスにまで遡ることができると考えられています。譬えとその導入部分は元来別の資料に基づくものでした。ルカの文脈に従えば、この譬えは「善いサマリア人の譬え」と呼ばれ、善いサマリア人のように隣人となって、隣人愛を実践することが求められています。

ではルカによる編集前の伝承の段階で、この譬えはどのようなものであったのでしょうか。イエスの周りには、社会的、経済的、精神的に、苦しい立場に置かれていた人が多く集まっていたと思われます。そこで彼らは追いはぎに襲われた旅人を自分と同一化したのではないのでしょうか。まず祭司が、次にレビ人が登場します。しかし、彼らは律法に従うゆえに瀕死の同胞を助けません。そして歴史的、宗教的に敵対視してきたサマリア人が、瀕死のユダヤ人を見て、感情が激しく揺さぶられ、いてもたってもいられない、という気持ちになり、思わず走り寄って、助けた、いや助けてしまったのです。そこには人種や宗教などからの蟠りはありませんでした。では聴衆はこのことを率直に喜び、受け入れることができたでしょうか。敵対視するサマリア人に身体を触れさせること、あるいは世話を受けることを潔しとする者は一人もいなかったのではないでしょうか。今まで瀕死の旅人と自分を重ねてきた聴衆は、ここで非常な戸惑いを感じたに違いありません。瀕死の旅人もサマリア人が近づいて来るのを見たとき、「近づくな。……おれに触れるな。」と心の中で叫んでいたのではないのでしょうか。しかし、彼に、サマリア人の思いがけない行動を拒む力はなく、親切に身をまかせる以外に術はなかったのです。そして、聴衆は、イエスがこの譬えで伝えようとしていること、苦しみにある人のすぐそばに、国籍や人種や宗教を越え、その人の隣人となる存在がその人の苦しみを共にして、寄り添っているというメッセージ、を受け取ったのです。さらに、この譬えを語るイエスのなかに、そのような善いサマリア人を発見し、苦しんでいる人のそばに神さまが寄り添っていることを喜びをもって受け止めたのではないのでしょうか。

この譬えはルカが福音書を編集する際に意味づけた、追いはぎに襲われ瀕死の旅人を助ける者の視点、隣人愛の実践の勧めではなく、イエスがユダヤ人に語った瀕死の旅人の視点、イエスとともに到来した予期せぬ喜びの告知、苦しんでいる人のそばに神さまが寄り添っていること、と考えることもできるのではないのでしょうか。